

ともしび
説教 『 御言葉はわが足の 灯 』

小河信一 牧師

詩編 119編 105節～112節

- 105 あなたの御言葉は、わたしの道の光
わたしの歩みを照らす灯。
- 106 わたしは誓ったことを果たします。
あなたの正しい裁きを守ります。
- 107 わたしは甚だしく卑しめられています。
主よ、御言葉のとおり
命を得させてください。
- 108 わたしの口が進んでささげる祈りを
主よ、どうか受け入れ
あなたの裁きを教えてください。
- 109 わたしの魂は常にわたしの手に置かれています。
それでも、あなたの律法を決して忘れません。
- 110 主に逆らう者がわたしに畏を仕掛けています。
それでも、わたしはあなたの命令からそれません。
- 111 あなたの定めはとこしえにわたしの嗣業です。
それはわたしの心の喜びです。
- 112 あなたの掟を行うことに心を傾け
わたしはとこしえに従って行きます。

初めに、本日の詩編を説き明かす前置きとして、「最高の美」を宿している「完璧な詩」についてお話ししたいと思います。

イタリア文学の専門家、須賀敦子すがあつこ氏（1929－1998）は、エッセイ『ミラノ 霧の風景』（白水社、2001年発行）の中で、「完璧な詩」というものがあると述べられています。一例として、現代イタリアを代表する詩人、ウンベルト・サバの詩集『地中海』の中の「若いころ、わたしはダルマツィアの 岸辺をわたり歩いた」で始まる詩が挙げられています。それは、詩人本人の評価によれば、音声や形式をはじめとして、ホメロスの英雄に託している古典的背景、太陽のきらめく地中海という情景、漂白の思いを伝える内容などの点から「完璧な」なのだと言います。確かに、日本文学の中にも、読者の魂を強く揺さぶり、暗誦され

ている天籟（^{てんらい}すぐれた）の詩があります。

また、そのような詩は、須賀氏が「リズムと音声にささえられて、深いところに音楽的なひろがりをもつ、うつくしい作品」と指摘されている通り、「最高の美」を宿していると言えるでしょう。ただし、「美」というものの表現や解釈こそ、それぞれの詩人の真骨頂が発揮されるところで、一概に定義することは難しいと思われま

ところで、旧約学者、ゲルハルト・フォン・ラートは、信仰的に言えば、「最高の美」とは、「神の自己放棄」であると断言したそうです。

サバの「若いころ、わたしはダルマツィア」はいざ知らず、もし、詩編119が最高に美しいものならば、その詩はまさに「神の自己放棄」を指し示しているでしょう。

神の計画のうちに成就した「神の自己放棄」は、言うまでもなく、主イエス・キリストの十字架です。キリストの十字架の出来事は、天から地に至るすべてを包み込んだ出来事であり、フォン・ラートに従えば、天にも地にも反映される美しさがあります。

果たして私たちは、「ヌン」（ヘブライ語アルファベットの第14番目）の詩集、詩編119:105-112（なかんずく105節）を「完璧な詩」として受け入れることが可能なのか、そして、そこにおいて私たちは、「最高の美」の表出として、十字架のキリストを仰ぎ見ることになるのか、澄んだ耳と目をもって読みましょう。

詩編119:105——

あなたの御言葉は、わたしの道の光
わたしの歩みを照らす^ひ灯。（新共同訳）

※ 残念なことに、新共同訳は原文の語順を替えています。

あなたの御言葉は、わたしの足のともしび
そして、わたしの道の光。（小河信一訳）

鍵語の「ともしび」と「光」が、ヘブライ語原文では、ネ^ルとオー^ルで脚韻を踏んでいます。原詩の持つ音韻や形式の美しさが伝わるように英訳してみましょう。

Your word is a lamp to my step
And a light to my street.

※ ‘my step’ 「わたしの一步」の原意は ‘my foot’ 「わたしの足」です。

※ ‘my street’ はここでは ‘my way of life’ の意味です。

参考までに言えば、このヘブライ詩の韻律（アクセント数）は、前半3＋後半2です。詩の語句を記号化すれば、前後半、ABC BĊ というように整然と配列されています。流麗であり、哀切な調べを奏でています。

この詩文は、単に「ともしび」や「光」の絵を描いているわけではありません。巧みな詩の構成美の下に「ともしび」や「光」が心地よい音となってこぼれ出していることが分かります。 「ともしび」から「光」へ、小から大へ、薄闇から栄光へ、という主旋律も明快です。

まず、詩編119:105の前半を読み味わいましょう。

あなたの御言葉は、わたしの足のともしび

詩行後半の「わたしの道の」との対比で考えるならば、「わたしの足の」というのは、「わたしの今いる場所の」と解されます。すなわち、神の言葉が、私たちのひと足ひと足、一日一日を照らしているということです。それ故に、私たちは「明日のことまで思い悩む」（マタイ6:34）ことなく、今日の労苦を担いつつ、感謝をもって一日を終えることができます。

「ともしび」と言えば、多くの方は、ろうそくのともしびを思い出すことでしょう。それは、人々の心に安らぎを与えると同時に、風が吹けばすぐに消えてしまうというはかなさを想わせます。

しかし、詩編119:105の「ともしび」は、神の言葉であり、その小さな輝きに、神の御力と御心があらわされるものです。詩編119の詩人と共に、ユダ王国崩壊後、バビロン捕囚の時代に、預言者イザヤは静かに「ともしび」を見つめていました。

イザヤ書42:3――

（わたし〔主〕の僕は）

傷ついた^{あし}足を折ることなく

暗くなってゆく^{とうしん}灯心（ろうそくやランプの芯）を消すことなく

裁きを導き出して、確かなものとする。

主の僕は、ユダの民が「傷ついた」ことやこの世の中が「暗くなってゆく」ことを直視しつつ、神のともされた小さな光に寄り頼みました。カルヴァンの詩編119:105の註解の通りに、神の言葉を傾聴し、神をまっすぐに見つめる澄んだ目を持つ人には、忍耐と幸いが備えられます。

「すなわち、神の言葉が、われわれを照破しょうは（闇を照らし破ること）しないかぎり、人間の生は暗闇の中にあり、貧しく、また惨めにも、さ迷い歩くほかない、ということを示している。…… それ故に、われわれの目を見開きさえすれば、そのうちに確かな光を示されるということを知ろうではないか。」（カルヴァン）

詩人の魂に突如降って来たような「あなたの御言葉は、わたしの足のともしび」という一節は、罪が闇夜のように支配する時代を象徴するものです。私たちに、「光と闇との ゆきかうちまた」（讚美歌276番）である旧約の時代の信仰を伝えるものです。

まだ詩編119:105後半について言及していませんが、たとえ「完璧な」というのが過大評価だとしても、この一節を代々に信仰者が暗誦したり、座右の聖句としていることは、この御言葉の実力を物語っています。

この説教の最後に、詩編119:105後半を説き明かすことにして、次に詩編119、「ヌン」の詩集の重要な聖句をたどりながら、結末の112節まで巡ってみましょう。

詩編119:107——

わたしは甚はなはだしく卑しめられています。

主よ、御言葉のとおり

命を得させてください。

「わたしは甚だしく卑しめられています」をより原文に即して訳すと、「わたしは極度に苦しめられました」となります。自分には抵抗するすべも無く、危難に巻き込まれてしまったことが暗示されています。カルヴァンは、この苦しみについて、「自分（詩人）が死によって攻め囲まれていた」ほどであると説明しています。

詩の構成の観点から読み直すと、私たちのこうむる苦難の上には、すでに希望の光が輝いています。「神の栄光にあずかる希望」（ローマの信徒への手紙5:2）である「ともしび」（詩編119:105）が「極度に苦しめられた」という闇に先行しています。

風の強さやともしびのはかなさこわを怖がることはありません。主イエス・キリストの御言葉こそが確かな保証です。

ヨハネ福音書16:33——

「あなたがたには世で苦難がある。しかし、勇気を出しなさい。わたしは既に世に勝っている。」

詩編119:111——

あなたの定めはとこしえにわたしの嗣業です。

それはわたしの心の喜びです。

ここで、神の言葉に聞き従う人は「喜び」に満ちあふれています。

おとめマリアは、何の準備も無かった時に、いやそれどころか、自分の事（婚約・結婚）に精一杯だった時に、突如、天使から「喜べ」（ルカ1:28）と命令されました。神の側から、ひとりの女に「御言葉のとおり、この身に成るように」（ルカ1:38）という信仰を呼び起こし、同時に、彼女を大いなる喜びで包み込んだのです。

また、神は、見失われた一匹の羊を捜し求める闇路の果てに、羊発見の「喜び」（マタイ18:13）の時が来ることを約束してくださっています。

詩編119:112——

あなたの掟 おきて を行うことに心を傾け

わたしはとこしえに従って行きます。

この詩編119の特徴は、105節に「あなたの御言葉」が掲げられている通り、神の言葉への集中です。詩編119:105-112の8節においては、一節も漏らすことなく、105「御言葉」、106「裁き」、107「御言葉」、108「裁き」、109「律法」、110「命令」、111「定め」、112「掟」というように、神の「言葉」を指す類語が連ねられています。そこには、一時も神の言葉から離れない詩人の信仰が表出されています。

そして、詩人が「あなたの掟」である御言葉に耳を傾けている、つまり、ほんとうに御言葉を聴き取って信従していることが、「あなたの掟（＝言葉）を行うことに心を傾けます」との句によって告白されています。

ヤコブの手紙1:22——

御言葉を行う人になりなさい。自分を欺いて、聞くだけで終わる者になってはいけません。

詩人は、日常生活の一步一步を照らす「ともしび」（詩編119:105）を見つめつつ、「とこしえに」（119:112及び111）まで、神への永遠なる従順に心を配っています。詩の初め（119:105）と終わり（119:112）との呼応、神の御言葉の啓示と人による御言葉の実践、この点でも、詩集「ヌン」は天と地に「とこしえに」響きわたる完璧な詩です。

さて最後に、オール「光」が出てくる詩編119:105後半を読む前に確認しておきたいことがあります。

詩編119の詩集「ヌン」では、冒頭にネル「ともしび」が置かれていますが、実のところ、天地創造の時、しかもその最初には、神とキリストによって、「光あれ」（創世記1:3）との命令のもとに、オール「光」が創られたということです。

従ってもともとは、私たちの足もと、私たちの今いる場所には、神の創られた大いなるオール「光」が輝きわたっているということです。

ところが、「光と闇との ゆきかう」ような時代になったのは、私たちの罪への墮落のゆえです。憐れみ深い神は、私たちを見捨てることなく、ネル「ともしび」を備えてくださいました。その時代、旧約の人々は忍耐をもって新しい時代の幕開けを待ち望みました。そのような中で、詩編119の詩人は、再びオール「光」の輝く時が来るという啓示を受けました。

詩編119:105の後半を読みましょう。

（あなたの御言葉は）

そして、わたしの道の光。

決して、罪の闇夜で終わりではなかった。「そして」、次に、幸いにもまことの光の時代がやって来ます。神の「そして」、すなわち、次への展開力は、「でも」とか「しかし」という私たちの言い訳や躊躇^{ちゅうちよ}を隅に押しやります（参照：パウロの伝道がアジアからヨーロッパへと進展した際の使徒言行録16:9の「そして」）。

その時には、私たちのひと足ひと足のみならず、「わたしの道」、すなわち、私たちの人生行路が照り輝いています。まるで先の先まで灯火がともされているハイウエーのような「私の人生の道」です。主にあって、はるか彼方の地、イスパニア伝道の幻（ローマの信徒への手紙15:24,28）を抱き続けたパウロの人生は、そのことを証しています。

人間の力では見渡せない将来が、上よりの「光」によって見通せるようになりました。「私はどこから来て、どこへ行くのか」（ヨハネ3:8、8:14）、私の人生の道が、この世に宿られたキリストによって見えるようになったのです。

コリントの信徒への手紙 二 4:6――

「闇から光が輝き出よ」と命じられた神は、わたしたちの心の内に輝いて、イエス・キリストの御顔に輝く神の栄光を悟る光を与えてくださいました。

旧約の詩人が、神の御言葉において望み見た「光」は、主イエス・キリストの救いの出来事のうちにあらわされた神の「栄光」、永遠の光によって成就しました。天地創造の時の「光」は、脆い「灯心」のように変わり果てて折られたり、かき消されたりすることはなかったのです。その「光」は、旧約時代の信仰者の期待にはるかに優って、「世の光なるキリスト」（ヨハネ8:12）によって輝きわたりました。全地の暗闇は、十字架につけられて死に、陰府にまで下られた主イエス・キリストの出来事によって打ち払われました。

主イエス・キリストは、まことの「光」に違いありませんが、弱く小さな「ともしび」となり、日々の労苦を背負っている私たちと一緒に歩んでくださいます。私たちは、死の向こうの光の世界まで、天の国まで、主と共にひと足ひと足歩んで行きたいと願います。主イエスは今、天において神の右の座にいまして、私たちの振る舞いを注意深く見守っておられます。そして、私たちの日常生活を照らす「ともしび」が消えてしまわないように、聖霊の派遣を通じ、油を送り続けておられます（参照：マタイ25:1-13）。

詩人は、神の支配される時代は、「ともしび」から「そして光」へ、薄闇から栄光へと巡るということを詩編119:105、わずか一節のうちに見通していたのです。これぞ神の喜ばれる「完璧さ」です。

マタイ福音書5:48 主イエスの言葉――

「だから、あなたがたの天の父が完全であられるように、あなたがたも完全な者となきなさい。」

私たちは、キリストに救われて、神の聖なる完全さにあずかることが許されています。神の言葉が照らす福音の光を仰ぎ、私たちの心にともしびを掲げ、神の栄光なる天の国をめざして歩んで行きましょう。